

2024 年度 健康医療スポーツ学部

理学療法学科／リハビリテーション学科理学療法コース

学修行動と学修成果の調査結果分析

健康医療スポーツ学部理学療法学科／リハビリテーション学科理学療法コースでは、建学の精神(実学の精神)に則り、基礎知識、理論の修得、幅広い専門知識や技術を身につけ、対象となる方が住み慣れた場所で暮らすことができるための理学療法を展開できる人材養成を教育目標に掲げ、基礎科目・専門科目を配置している。カリキュラムポリシーにおいては、地域住民と密着した医療人を養成する目的を達成できるように、基礎学力や基礎教養の向上を目指す教養科目、及び人体や医学全般に関して学び、医学及び理学療法学の学問内容と技術を理解するとともに、地域社会における健康・医療の実践を養い、学生同士が明晰かつ批判的に思考できるようになることを目指している。今回は、学修面・生活面を中心に4年生の分析を主として報告する。

1. 授業関連・学修支援に関する項目

設問7.「授業の予習・復習、授業課題のための勉強」では、「頻繁にした」、「かなりした」の割合が1・2年生では約30%であるのに対し、3・4年生では50%以上を占めた。4学年全体としては大学全体よりも「頻繁にした」「かなりした」の割合が高かった。設問8.「学修支援システム(「manaba」)を利用した勉強」については、理学療法学科／理学療法コース全体の分布は大学全体と比べ概ね同様の分布を示し、学年での比較においては3年生が約50%と高かった。設問9.「授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望」では、1・2年生で「頻繁にした」「かなりした」が計15%台であるのに対し、3・4年生では計25%台であった。設問11.「友人と一緒に勉強」では、1・2年生で「頻繁にした」「かなりした」の割合が計40%台であるのに対し、3・4年生では計60%以上であり大学全体と比して高い割合であった。設問12.「メディアライブラリーセンター(図書館)を利用した勉強」では、1年生計16.9%、2年生計41.1%、3年生51.8%で学年が上がるにつれ増えたが、4年生では計23.6%であり、国家試験対策をグループワークで行なっている影響が考えられる。設問13.「自習用教室等を利用した勉強」では、「頻繁にした」「かなりした」の割合が1年生17.0%、2年生32.0%、3年生36.2%、4年生57.0%と学年が上がるにつれ高くなっており2年生以上から大学全体より高い割合であった。設問14.「授業時間外の学修時間」では、1-3年生は大学全体と同様に1-2時間の回答が最も多かったが、4年生では3-4時間、4-5時間の割合が最も高く、3時間以上の合計が60%を超えていた。設問19.「授業欠席回数」では、「なし」の割合が1年生17.0%、2年生26.9%であるのに対し、3・4年生ではいずれも60%以上と欠席なしの回答が大幅に高かった。3年生以上では、1回の授業の必要性や学修の意識が高くなっていることがうかがえた。

設問 23.「授業の内容についての満足度」は、「とても満足」「かなり満足」「やや満足」の割合が、全学年で 80%以上、「やや不満」「とても不満」は 20%未満となり良好な結果であった。設問 24.「所属する学科・コースで学ぶことができる教育内容」についても、「とても満足」「かなり満足」「やや満足」が 90%以上を占めていた。「とても満足」の回答は、1 年生 20.8%、2 年生 10.3%であるのに対し、3 年生 32.5%、4 年生 25.0%と 3・4 年生で満足度が高かった。設問 31.「学科・コースの教員による指導・相談」では、「とても満足」「かなり満足」「やや満足」の割合の合計が全学年で 90%以上であった。設問 33.「就職支援室による進路・就職に関する支援」においても全学年において「とても満足」「かなり満足」「やや満足」の割合の合計が全学年で 90%以上であった。

設問 35.「授業の内容についていけない」に対する不安の割合は、「大いにある」の割合が 1 年生で 26.4%、2-4 年生では 5%~12%であり、1 年生の割合が高くあったため、授業の構成や進行、コース教員による支援や相談について再考する必要がある。

2. 授業時間以外での生活(学修以外)について

設問 16.「睡眠時間」は、全学年で 5-6 時間の回答が最多であった。設問 17.「趣味や娯楽の時間」では、全学年で「2-3 時間」が最多であり学年ごとの分布に差はなかった。

設問 20.「一週間あたりの部活動やサークル活動を行った回数」は、3 回以上の割合は 1 年生 11.3%、2 年生 2.6%、3 年生 4.8%、4 年生 1.4%であった。設問 21.「アルバイトの回数」は、全学年で「3 回」が最多で、週 2-3 回の学生が半数以上を占めていた。設問 29.「保健室や付属の医療施設」に関する満足度は、全学年で 90%以上が「とても満足」「かなり満足」「やや満足」と回答していた。

3. 不安に関する回答結果について

設問 36.「卒業後にやりたいことがみつからない」の設問は、「あまりない」「全くない」が 1・2 年生では計 40%台であったが、3・4 年生では計 20~30%であり将来について明確に意識できている傾向にあった。設問 37.「希望の就職先や進学先へいけるか不安だ」という設問に対して「大いにある」「少しある」は 1 年生で計 77.3%、2 年生で計 69.3%、3 年生で 66.3%、4 年生で 38.9%と学生が上がるにつれ不安が減っていた。設問 39. ~41. の「対人関係・身体面・精神面の不安や悩み」については「あまりない」「全くない」の回答が全学年で約 80%であったが、「少しある」「大いにある」の回答が全学年を通じ一定数存在することから、引き続き定期的な個別面談の実施や支援体制に関する案内を継続的に行なう必要がある。また、設問 43.「不安や悩みについて誰に相談しましたか」について、全学年で 70%以上が友人または家族であったが、大学の教職員の割合が全学年 3%未満であったこと、「誰にも相談していない」の回答が 1・2 年生で 10%以上であったため、教員へ相談しやすい環境整備の必要性が課題となった。

4. 学修成果について

設問 44.「幅広い知識と教養」、設問 46.「他の人と協力しながら物事を進める力」、設問 47.「も

のごとを分析的・批判的に考える力」、設問 65.「理学療法士になる使命感・責任感・倫理観」、設問 69.「理学療法実践のための総合的知識」については「十分付いた」と回答した割合が1・2年生では10%台であるのに対し、3・4年生では20%台であり、カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーに即した項目では3年生以降で学生が身に付いたと実感していた。設問 50.～52.「解剖学的基礎知識・生理学的基礎知識・運動学的基礎知識」においても、3年生以降で学生が身に付いたと実感していた。

5. 4年生についてのまとめ

学修面では、授業の予習・復習、授業以外での学修時間、自習用教室の利用について他学年と比し、多いこと、友人と一緒に勉強する回答が多い特徴があり、昨年度の分析と同様の結果であった。また、不安や悩みについて、「誰とも相談しない」の割合が4年生では低い特徴があり、他者と協働し、不安や悩みを相談できる人間関係の構築や環境づくりが身に付いていることがうかがえた。学修時間や大学にいる時間が多い一方で、睡眠時間や趣味や娯楽の時間は他学年と大きく変わらないことから、明確な将来の目標に向かって充実した生活を送ることができていると考えられる結果であった。

以上

2024 年度 健康医療スポーツ学部

リハビリテーション学科作業療法コース

学修行動と学修成果調査アンケートの解析

健康医療スポーツ学部リハビリテーション学科作業療法コースでは、建学の精神と卒業認定・学位授与の方針に掲げた教育目的を達成するため、以下①～⑤カリキュラムを編成し授業を行うこととしている。

① 大学での学修の基礎となる全学共通科目(必修)として、セミナー科目、英語、および情報リテラシー演習・DS概論を開講し、社会生活を営む上で必要な教養とコミュニケーション能力を養成する。

② セミナー科目では6つの力の養成を基礎としつつ、学年進行に合わせながら経時的に1年生から4年生までキャリア教育を行う。特に1～2年次のフレッシュセミナーでは、大学生活や社会生活への順応と、コミュニケーション能力の向上を目指す。さらに3～4年次に行われるアドバンスセミナーでは、卒業後の社会生活に対応した責任感、倫理観、自己管理能力を身につける。

③ 保健医療に携わる者として求められる豊かな人間性と教養を養成するとともに、関連する職種と連携して働くための協調性、責任感、基礎知識、コミュニケーション能力を身につける。

④ 学内演習や臨床実習などを取り入れながら、地域社会に根ざしたリハビリテーションの実践に必要な専門科目を配置し、作業療法の基礎知識と専門知識・技術を修得する。

⑤ 国家試験受験資格取得に必要な科目を系統的に配置し、身体機能・精神機能・発達機能・高齢期の4領域と、急性期から社会復帰まで幅広くシームレスな対応を必要とする作業療法の専門知識と技術を修得する。

上記の内容を踏まえ、2024年度の学修行動評価アンケートの結果を、1. 目標とする力、2. 授業関連事項、3. 授業期間中における時間の使い方について、4. 授業期間中における実施事項、5. 教育内容や設備、学修支援への満足度、6. 不安や悩み、7. 能力の定着について、8. 上級学年(4年生)の調査結果について分析する。

1. 目標とする力について

目標とする力について、「十分身についた」と「かなり身についた」を積極的な効果と捉えた場合、人間愛(利他の心)については56.1%、他者と協働する力については70.7%、自立して逞しく生きる力は58.5%、創造的な問題解決能力では50.0%、専門性を高める意欲が61.0%、わが国と世界の持続・発展に尽くす力では46.4%と概ね中間位を示した。なかでも他者と協働する力は高い数値を示したが、2年次以降に大きく割合が増しており、本格的な実習の経験が大きく影響しているものかと考えられる。

2. 授業関連事項について

授業の予習や復習、manaba を用いた学習、授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問、就職や資格取得に関わる勉強などについては「頻繁にした」と「かなりした」を主体的な学習と捉えた場合、授業の予習や復習では40.3%、manabaを用いた学習では47.6%(前年度55.0%)、授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問は21.9%、就職や資格取得に関わる勉強などについては31.7%であった。

また、友人と一緒に勉強については51.2%(前年度:グループワークでの回答は31.7%)、図書館の活用は23.2%(前年度28.4%)と、概ね昨年度と同様の結果であった。

3. 授業期間中における時間の使い方について

授業時間外での学習時間は、学習時間が1時間未満の学生が19.5%(前年度25%)であった。

また学内で過ごす時間については6～7時間が18.3%と最も多かった。睡眠時間は5～6時間が43.9%で最も多く、6～7時間の学生は22.0%であった。一方、趣味や娯楽に費やす時間は1～2時間が31.7%、2～3時間が32.9%であり、読書に費やす時間が1時間未満は68.3%であった。

4. 授業期間中における実施事項

授業の欠席回数については、「なし」「1回」との回答で75%を超えていた。また部活動やサークルへの参加も「なし」「1回」の回答が90%を超えていた。

アルバイトの回数については「なし」「1回」との回答が19.5%(前年度13.4%)と前年度から微増しており、週に3回以内でのアルバイトを実施している学生は81.7%(前年度76.7%)と大幅に増加した。一方、ボランティア参加については約半数が実施なしと回答しており、年に1～2回参加の学生は24.4%であった。新型コロナウイルスの感染拡大が落ち着いたことから、アルバイト回数を増やす学生が増えてきたものと思われるが、学生の1/5は学習時間が1時間未満であり、学修不足が懸念される結果となった。

5. 教育内容や設備、学修支援への満足度

講義教室や実習室、図書室や保健室、学生食堂、就職支援室については概ね中間位を示した。しかし、講義教室の設備については、不満を感じている学生は40%と高い比率であった。新キャンパス設立まで目前ではあるが、現状の不満に対しても対応が必要と思われる。

6. 不安や悩み

授業の内容について53.7%(前年度51.7%)の学生が、ついていけるか不安に感じていた。また学業を続ける上で経済的に困難さを感じている学生は30.5%も存在した。また3年次に半数程度、4年次には40%程度の学生が身体的・精神的な不安をあげていた。3年次からは本格的な臨床実習が始まり、一人暮らしをする学生も少なくない。そのような影響が結果に表れたと思われる。

7. 能力の定着について

結果は概ね中間位を示したが「他者と協力しながら物事を進める力」が 57.3%、「人とコミュニケーションする力」が 62.2%と比較的高値であった。

8. 最上級学年(4年生)の調査結果

4年生は国家試験対策として他の学生と協働学習する時間を多くとるよう指導しているため、他の学年に比べ「友人と一緒に勉強」する項目が高値であった。また授業時間外での学習時間が他の学年と比べると突出して長く、長時間国家試験勉強を行っていることがうかがえた。

アルバイト回数に関しても国家試験対策に専念するためか他の学年より大幅に少ない結果となっているが、週4回行っている学生も 31.6%存在した。

まとめ

2024年度は感染症の影響も小さくなり、学生の活動も活発化した。一方で、アルバイトの実施回数を増やす学生も増えてきており、結果的に自主学習時間が減少している。4年次においても過度な回数のアルバイトを入れている学生が増えており、国家試験対策の点からも十分な指導と支援が必要と思われる。

経済的な不安を抱える学生も 30%程度存在するため、配慮が必要である。

以上

2024 年度 健康医療スポーツ学部

柔道整復学科

学修行動と学修成果調査アンケートの解析

健康医療スポーツ学部柔道整復学科では、2024年度学修行動アンケートの結果を以下の6項目に分類し分析する。1. 主体的な学修について 2. 学修資源の利用(学修支援システムmanabaや図書館)について 3. 大学設備・教育内容・学修支援について 4. 授業時間外の学修時間・欠席状況・アルバイトについて 5. 部活動やサークル活動などの学生生活について 6. 一般的教養・専門知識・医療人としての能力に関する成長実感について 7.まとめ

1. 主体的な学修について

「授業の予習や復習について」は「頻繁にした」と「かなりした」を合わせると全体では42.0%であり、昨年の26.9%から増加した。4年生では78.6%であり、昨年の53.1%と比較すると増加し、他学年より高かった。

また「授業中やオフィスアワーを利用した質問や意見表明」については「頻繁にした」と「かなりした」との回答が全体で23.1%であり、昨年の7.5%から増加した。

主体的な学修について、昨年より増改した結果であった。また、最終学年の4年生に関しては他学年と比較して主体的な学修時間が大幅に高かった。これは、卒業、就職、国家試験、資格試験という明確な目標があり、主体的な学修時間が増加していることが考えられる。昨年度と比較して、1～3年生でも、主体的な学修時間増加しており、1～3年生から将来を見据えて、より主体的な学修に取り組めるようになってきた。ただ、まだまだ4年生時に比べ学修時間が少ないので、教員による声掛けや学修環境の整備などを行い、試験や実習での定期的な評価課題などを組み込みながら、最終的に自主的な学修へと繋げていくことなどのアプローチが望まれる。

授業中やオフィスアワーの利用した教員への質問について、利用した学生は昨年度比が増加した。これは、新型コロナウイルスの感染状況が落ち着き、2023年5月に法改正があり、対面でのコミュニケーションが取りやすくなったことが考えられる。特にセミナー担当教員や卒業研究担当教員などは、学修面以外にも進路指導、就職指導などを積極的に取り組んできたことが増加の要因であると考ええる。今後も、教員学生間のコミュニケーションをとりやすい環境づくりに、これまで以上に力を入れていく必要がある。

2. 学修資源の利用(学修支援システムmanabaや図書館)について

「友人と一緒に勉強」では「頻繁にした」と「かなりした」は55.0%と昨年の37.1%より増加した。4年生に関しては、「頻繁にした」と「かなりした」は 64.5%と他学年と比較すると高い数値であり、昨年の54.5%と

比較しても増加した。

学修資源の利用(学修支援システムmanabaや図書館)について「学修支援システムmanaba」等の利用に関しては「頻繁にした」「かなりした」が28.6%と昨年の23.3%と比較して増加した。4年生において「頻繁にした」「かなりした」が13.1%で他学年より低い数値だった。

また「メディアライブラリーセンター(図書館)を利用した勉強」について「頻繁にした」と「かなりした」は37.7%で昨年の22.9%と比較して増加していた。4年生において「頻繁にした」「かなりした」が54.1%で他学年と比較して高かった。

友人と一緒に勉強や学修資源の利用や学修場所については、授業形態や社会情勢や個人の学修方法の変化に左右されることが考えられる。今年度に関しては、友人とグループワークを行う学生が多い結果となった。また、タブレット端末での学修をメインとしている学生やプリント・ノートなど紙媒体をメインとしている学生など様々であり、学修方法や学修場所は多様となり、昨年とは異なる結果となったことが考えられる。本学科の特に4年生は国家試験が控えているためグループワークでの学修を指導しており、他学年よりも数値が増加したと考えられる。多様化する学修方法に応じて全学年における積極的な学修資源の利用が望まれる。

3. 大学設備・教育内容・学修支援について

全ての項目の中で「とても満足」と「かなり満足」の合計を比較してみると、全ての項目で満足度が高かった。一方「講義教室の設備(空調や照明を含む)」と「学生食堂」の項目は「やや不満」「不満」の割合が高くなっていた。全体としては「とても不満」と回答している割合は少ないため、大きな不満をもった学生は少ないと考えられた。

大学施設の満足度に関しては、池袋キャンパスや中野キャンパスに比べてやや不満が多い結果となったが、2027年度より新キャンパス開校予定であり、施設は充実する予定である。教育・学修支援に関しても充実した支援および環境づくりを目指して教育指導をしていきたいと考えている。

4. 授業時間外の学修時間・欠席状況・アルバイトについて

学科全体で見ると「授業時間外におこなった学修時間」は1時間未満が28.6%、1～2時間が37.3%、2～3時間が13.7%、3～4時間が7.5%、4～5時間が5.1%、5～6時間が3.1%、6～7時間が1.2%、7～8時間が0.8%、8時間以上が2.7%だった。4年生に関しては1時間未満が3.3%、1～2時間が8.2%、2～3時間が14.8%、3～4時間が26.2%、4～5時間が19.7%、5～6時間が11.5%、6～7時間が1.2%、7～8時間が0.8%、8時間以上が2.7%で他の学年と比較すると授業時間外での学修時間が多かった。

「趣味や娯楽の時間」で一番多かったのが1～2時間であり38.4%であった。「授業時間外におこなった学修時間」で一番多かったのが1～2時間であり37.3%であった。趣味の時間と授業以外の学修時間がほぼ同じである。全ての学生が対象ではないが、優先順位などを考えさせるような指導が必要であると考え

る。

また「アルバイトの回数」に関して、全体では週に1～3回以上アルバイトをしているものが約64.3%、1～5回以上まで含めると89.4%の学生が何らかのアルバイトをしているという結果であった。しかし4年生ではなし(0回)が14.8%、週5回以上は3.3%で他学年と比較すると少ない結果であった。

アルバイトをする学生が多くいる結果となった。他学年と比較して4年生はアルバイトの頻度や時間が大幅に減少している。それは卒業、就職、国家試験、資格試験に時間を費やすためであると考えている。1～3年生は、学業に対する優先順位を意識した学生生活を送ることに対して、また、常識的な範囲でアルバイトを行うなどこれまで以上に丁寧な指導が必要であると考ええる。

5. 部活動やサークル活動などの学生生活について

部活動やサークル活動などは、大学全体で「部活動やサークル活動を行った回数」は「なし」が58.0%であった。部活動やサークル活動は自由意志での活動であり、活動は少ない傾向にある。しかし、1～2年生では50%以上の学生が部活動やサークル活動を行っており、参加できる環境は整っている。一方3～4年生になると、部活動への優先順位が低くなることが示唆される結果となった。

また「学生生活」について「とても満足している」と「かなり満足している」を合わせると全体で59.7%と昨年の45.0%より高くなった。4年生では57.4%と昨年の37.9%より高い結果だった。しかし、他学年と比較するとやや低い結果となった。4年生では1～3年までの学生生活というより社会人への準備の時間が多く、満足度が低くなったと考える。

2023年5月より感染症に関する法改正により全面的に部活動の活動制限がなくなり積極的に活動している姿が見られた。来年度以降は更に活動が盛んになることが予想される。千葉キャンパスの特徴でもある運動部はもちろん、文化部やスポーツアカデミーなど多様な活動が可能である。学校、教職員、学生、地域の方々が施設利用に関して、できるだけ有意義な学生生活を送れるような教育体制を整えることが必要である。

6. 一般的教養・専門知識・医療人としての能力に関する成長実感について

「一般的な教養」について「十分付いた」と「かなり付いた」を合わせると、1年生で64.2%に対して4年生で60.6%が身に付いたと回答した。

専門知識に関する質問「身体の構造や機能に関する基本的知識」について「十分付いた」と「かなり付いた」を合わせると、1年生で55.2%に対して4年生で67.2%が身に付いたと回答した。また「運動器の外傷に関する基礎知識」について「十分付いた」と「かなり付いた」を合わせると、1年生で55.2%に対して4年生で70.5%が身に付いたと回答した。さらに「柔道整復師としての知識と技術力」について「十分付いた」と「かなり付いた」を合わせると、1年生で56.7%に対して4年生で63.9%が身に付いたと回答した。

医療人としての能力に関する質問「メディカルスタッフとして行動できる力」について「十分付いた」と

「かなり付いた」を合わせると、1年生で56.7%に対して4年生で62.3%が身に付いたと回答した。また、「他の医療職や多職種と連携(情報提供・収集)する力」について「十分付いた」と「かなり付いた」を合わせると、1年生で56.7%に対して4年生で57.3%が身に付いたと回答した。

全体と4年生を比較すると、ほとんどすべての項目で4年生の方が高い数値となった。すなわち入学から卒業年度までに「専門知識・医療人としての能力」が付き、成長実感がついていることを表す結果となった。

しかしながら、昨年度と同様に「一般的教養」について「十分付いた」と「かなり付いた」を合わせると、1年生より4年生が低い結果であった。例年であれば、学年が進むにつれて「一般的教養」が身に付いているという結果になるのだが、4年生はコロナ感染症の影響で低学年時のセミナーなどでのレポート発表やプレゼンテーションの機会が少なかったことが影響しているかもしれない。学修意欲の高い学生は多いが、「一般的教養」については、自信がない学生が多いと考えられる。「一般的教養」は社会人としての全ての基礎として必要な能力であるため、教育に力を注いでいきたいと考えている。

また、全体と4年生の比較において「患者(利用者)の人権を尊重する態度」が(「十分付いた」と「かなり付いた」を合わせると1年生62.7%、4年生73.8%)と「患者(利用者)や家族に対する思いやりの心」が(「十分付いた」と「かなり付いた」を合わせると1年生65.6%、4年生73.8%)と4年生が高いが、大きな差はなく1年生でも高い数値となっていた。これは、1年次から臨床実習で患者と触れ合う機会があり、他者を思いやる気持ちが早い時期から養われている可能性が示唆された。

7. まとめ

4年生は、学修時間の大幅な増加が見られ、学びに対する主体性が顕著に表れました。学修以外の活動、たとえばアルバイトや部活動・サークル活動などに費やす時間は減少し、大学生活の後半を社会人としての準備に充てている様子がうかがえます。これは、卒業、就職、国家試験、資格取得といった明確な目標に向けた意識の高まりが背景にあると考えられます。

一方で、1～3年生では4年生に比べて学修時間が少ない傾向が見られましたが、アルバイトや課外活動に積極的に取り組む姿勢から、学生生活の充実という観点では一定の成果が得られているとも言えます。

本学科では、4年生が学修面だけでなく、社会人としての自覚や責任感を育み、自己成長を実感していることが今回の調査から明らかになりました。

しかしながら、こうした成長を4年生に限らず、より早い段階から促すことが今後の課題です。1年次から主体的な学修姿勢を育むためには、早期の臨床実習の導入や、就職準備を見据えたキャリア教育の充実が求められます。医療人としての自覚と自己管理能力を段階的に身につけられるよう、全学年を対象とした継続的な支援と指導体制の強化が必要である。

また、学生が自身の成長を実感し、学修意欲を高めるためには、定期的なフィードバックや成果の可視

化が重要である。今後も、ポートフォリオの活用やルーブリック評価の導入、定期的な模擬試験の実施などにより、学修の進捗や達成度を明確にし、学生自身が主体的に振り返る機会を設け、成長を実感できるような工夫が必要である。

以上

2024 年度 健康医療スポーツ学部

医療スポーツ学科 救急救命士コース

学修行動と学修成果調査アンケートの解析

I. 本学の「目標とする力」の修得について

Q1「人間愛(利他の心)」、Q2「他者と協力する力」、Q3「自立して逞しく生きる力」、Q4「創造的な問題解決能力」、Q5「専門性を高める意欲と力」、Q6「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」のすべての項目において、「十分身に付いた」「かなり身に付いた」「やや身に付いた」の合計が 90%以上を占め、本学の教育の効果が表れていると思われる。

II. 学修行動と学生生活について

1. 授業関連について

Q7「授業の予習・復習」については「頻繁にした」「かなりした」にさらに「時々した」を加えると、合計 96%(小数点以下四捨五入・以下同)であった。同様に Q8「学修支援システム(「manaba」)を利用した勉強」は 86%、Q9「授業中やオフィスアワーを利用した質問や意見表明」は 70%、Q10「就職や資格取得に係る勉強」は 91%、Q11「友人と一緒に勉強」は 85%、であった。同様に Q12「メディアライブラリーセンター(図書館)を利用した学習」は 77%、Q13「学内の自習用教室等を利用した勉強」は 67%であった。

この結果からは、将来救急救命士として消防機関に就職したいということを念頭に、授業の予習、復習をし、資格、公務員を中心とした就職に関する勉強、情報収集を行っていることがうかがえる。ただ Q9「授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望」についてはその他に比較して数値が低く、積極的に発言するのをためらう傾向があり、コミュニケーション能力の向上が望まれる。また堅苦しい雰囲気でないオフィスアワーの利用を今後進めたい。さらに Q11「友人と一緒に勉強」のようなグループ学習も多いが、Q8「学修支援システム(「manaba」)を利用した勉強」の結果から manaba 等の IT システムを活用している学生が多いことがわかる。それには 2020 年度から続いているコロナ禍による感染症リテラシーの上昇も影響していると思われる。また、Q12「メディアライブラリーセンター(図書館)を利用した勉強」、Q13「学内の自習用教室等を利用した勉強」については、利用した学生は、6割くらいで、比較的少なかった。今後は感染の収束状況をにらみながら、それに適した学習方法の指導を行っていく必要がある。

2. 授業期間中の時間配分について

Q14「授業時間外の準備学習、復習、授業課題のための学修時間(1日あたり)」は 1 時間以上の合計が 88%であり、今年度の当コースの学生は授業時間外の予習、復習にあてる時間がかかなり多いと思われる。Q15「学内で過ごす時間(1日あたり)」については、4 時間以上の学生が 63%と過半数を占め、授業以外の時間に学内に残り勉強している学生も多いと思われる。Q16「睡眠時間(1日あたり)」については全体としては特に問題はないと考えられるが、4 時間以下の学生も 9%ほどおり、健康のためもっと睡眠時間をと

るよう指導が必要な学生も一部いると思われる。Q17「趣味や娯楽の時間(1日あたり)」については4時間以上の学生は15%であり、その程度であれば特に問題はないと思われる。ただ、8時間以上の学生も少数ながらいるので、生活指導が必要な学生もいるとは思われる。Q18「本を読んだ時間(1週間あたり)」は1時間未満が64%で過半数に達しており、大学全体と同様に当コースでも読書離れは進んでいると思われる。

3. 授業期間中の行動について

Q19「全履修科目を平均した場合の授業欠席回数(15回授業を基準にして)」は「なし」13%、「1回」23%、「2回」29%とこれら3つで過半数を占め、出席状況は良好である。Q20「部活動やサークル活動を行った回数(1週間あたり)」については行っていないものが69%を占めていた。Q21「アルバイトの回数(1週間あたり)」は「なし」が9%でほとんどの学生がアルバイトをしていることが示されている。Q22「ボランティア活動の回数」は「なし」が73%であり過半数の学生が行なっておらず、これは大学全体の傾向と一致する。

4. 本学の設備や教育内容、学生支援について

Q23「授業の内容」、Q24「所属する学科・コースで学ぶことができる教育内容」、Q25「学生生活」、Q26「講義教室の設備(空調や照明を含む)」、Q27「演習室や実習室の設備や器具」、Q28「メディアライブラリー(図書室)の設備や学修環境」、Q29「保健室や付属の医療施設」、Q30「学生食堂」、Q31「学科・コースの教員による指導・相談」、Q32「事務職員によるサポート」、Q33「就職支援室による就職に関する支援」、Q34「大学全般」の「やや満足」「かなり満足」「とても満足」の合計は全て80%以上であった。本学の設備や教育内容、学生支援に関しての学生の評価は全体的に満足度が高いと考えられる。

5. 不安や悩みに関して

Q35「授業内容についていけない」とQ37「希望の就職先や進学先へ行けるか不安だ」については「大いにある」と「少しある」の合計が51%と69%になっており、普段の授業や進路について学生らしい悩みと不安を持っていることがわかる。これらについては勉学に励むことがその不安の払拭につながると事を理解させ指導していく必要がある。それ以外の質問については「あまりない」と「全くない」で過半数を占め特に問題はないと思われる。またQ43「主な相談相手」については友人、家族、先輩など身近な人物の合計が78%で多数を占め、これは大学全体の傾向と一致する。

II. 学修成果について

Q44 から Q63 における全ての質問項目において「少し付いた」以上の回答が80%以上となっており、入学時と比べて様々な能力が身について、自分が成長していることを自覚していると考えられる。

4年生に関して

「4年間の学生生活を総括する」という視点から、以下、4年生のアンケート結果について、全学年の結果と比較して別に検討する。

I. 本学の「目標とする力」の修得について

項目 1. すべての設問において、他の学年と同様に全体的に修得出来ているという意識が高く、特に見劣りする点はない。

II. 学修行動と学生生活について

項目 2. 授業関連について、全ての設問で4年生が「頻繁にした」と回答した割合は全学年の値を上回っており、学習意欲の向上が起きていると思われる。特に Q10「就職や資格取得に関わる勉強」の項については全学年が 30%なのに対して 4 年生だけのデータでは 55%となっており、自らの置かれた状況を理解して勉学に励んでいる様子が見えてくる。

項目 3. 授業期間中の時間配分について、予習、復習などの時間配分についても 4 時間以上が全学年では 13%だったのに対し 4 年生では 32%と 2.5 倍に増加し、これについては就職活動（公務員試験）や国家試験が間近に迫る環境が関連すると考えられる。

項目 4. 授業期間中の行動について、授業の欠席回数が 2 回以下のものが全体では 65%であるのに対し、4 年生では 63%とわずかに減っているが大差ない。これは 4 年生になると卒業に必要な単位数を既に揃えてしまっている学生も多いことが関連すると思われる。部活動、アルバイト、ボランティア活動については、すべてにおいて 4 年生では行っていない学生は全体に比べ減る傾向があったが、これは就職や資格取得に関わる勉強を優先しているためと思われる。

項目 5. 本学の設備や教育内容、学生支援に関しては、Q 23「授業の内容」が全学年 20%に対して 4 年生 31%、Q24「教育内容」が全学年 24%に対して 4 年生 31%、Q31「学科・コースの教員による指導・相談」が全学年 24%に対して 4 年生 39%、Q33「就職支援室による就職に関する支援」が全学年 27%に対して 4 年生 40%と、とても満足と回答した割合は顕著に増加しており、最終学年に現在の就職や資格取得のための活動が、この結果につながったものと考えられる。

項目 6. 不安や悩みに関して、全体では「授業の内容についていけない」と「希望の就職先や進学先へ行けるか不安だ」について「大いにある」と「少しある」の合計が、それぞれ 51%と 69%になっているが、4 年生では 29%と 39%であり、かなり減少している。これは、卒業も進路も決まった学生が多いためと思われる。

III. 学修成果について

大学入学時に比べて能力がついたと思うかに関しては、多くの質問において、「十分に付いた」と「かなり付いた」の合計は 4 年生の回答が全体のものを上回っていた。

特に以下の質問については、Q45「文章（レポート）を書く能力」は全体 49%→4 年 66%、Q46「他者とのコミュニケーション能力」は全体 68%→4 年 82%、Q55「人体の構造と機能に関する基本的知識」は全体 60%→4 年 71%、Q59「救急疾患の重症度・緊急度を判断できる能力」は全体 64%→4 年 76%、Q60「外傷の重症度・緊急度を判断できる能力」は全体 63%→4 年 74%、Q61「臨床実習の場で傷病者の状態を把握する能力」全体 55%→4 年 68%、Q62「救急救命士になるための総合力」は全体 50%→4 年 65%、Q63「救急医療体制に貢献できる人材」は全体 50%→4 年 65%、と 10%以上の顕著な上昇が見

られた。4年生については、卒業を前に4年間を振り返って、大学入学時に比べて自分自身が大きく成長していると実感していると考えられる。

全体のまとめ

救急救命士コースの学生は、救急救命士の資格取得を目標に学修し、自分自身の能力の向上も自覚している。しかし自ら教員等にコミュニケーションを取り積極的に学習することに関しては、4年生になるまで自信を持ってない学生も多く見られ、今後の課題といえる。

以上

2024 年度 健康医療スポーツ学部

医療スポーツ学科 トレーナー・スポーツコース、アスリートコース

学修行動と学修成果調査アンケートの解析

項目 1 本学の「目標とする力」がどの程度身についたか

設問1、「人間愛(利他の心)は身に付きましたか」は、トレーナー・スポーツコース(以下トレスポ)において、「十分身に付いた」「かなり身に付いた」「やや身に付いた」の合計が 97.9%、アスリート・コース(以下アスリート)は 97.4%であった。設問 2、「他者と協働する力は身に付きましたか」は、同様にトレスポ 96.4%、アスリート 98.7%であった。設問 3、「自立して逞しく生きる力は身に付きましたか」は、同様にトレスポ 97.5%、アスリート 100%であった。設問 4、「創造的な問題解決能力は身に付きましたか」は、同様にトレスポ 94.6%、アスリート 94.1%であった。設問5、「専門性を高める意欲と力は身に付きましたか」は、同様にトレスポ 97.5%、アスリート 92.1%であった。設問 6、「わが国と世界の持続・発展に尽くす力は身に付きましたか」は、同様にトレスポ 90.6%、アスリート 87.5%であった。どの設問においても高い数値で好結果となっている。「目標とする力」が身についているとの自覚が学生にはあることがわかる。

項目 2 2024 年度の授業に関連して、以下のことをどのくらいしましたか。

設問7、「授業の予習や復習や復習、授業課題のための勉強」は、トレスポにおいて、「頻繁にした」「かなりした」「時々した」の合計が 83.4%、アスリートは 81.6%であった。設問 8、「学修支援システム(「manaba」)を利用した勉強」は、同様にトレスポ 88.5%、アスリート 84.2%であった。設問9、「授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望」は、同様にトレスポ 63.5%、アスリート 57.2%であった。設問10、「就職や資格取得に関わる勉強」は同様にトレスポ 81.6%、アスリート 75.6%であった。設問11、「友人と一緒に勉強」は、同様にトレスポ 75.5%、アスリート 72.4%であった。設問12、「メディアライブラリーセンター(図書館)を利用した勉強」は、同様にトレスポ 63.2%、アスリート 47.4%であった。設問 13、「学内の自習用教室等を利用した勉強」は、同様にトレスポ 45.5%、アスリート 40.7%であった。設問7、「授業の予習や復習や復習、授業課題のための勉強」および、設問 10、「就職や資格取得に関わる勉強」が高値であった。これらは、アドミッション・ポリシーにある、指導者や教員養成に関わる資格取得に意欲のある入学者の受け入れが行われている結果と考えられる。

項目 3 2024 年度を平均して、授業期間中一日あたり以下のことにかけた時間について

設問 14、「授業時間外に行った予習や復習、授業課題のための学修時間(1日あたり)」は、「1 時間未満」がトレスポ 40.1%、アスリート 67.8%で授業時間外の学修がわずかで残念な結果となった。設問 15、「学内で過ごす時間(1日あたり)」は、3～4 時間の層が多く、トレスポ 20.9 %、アスリート 24.3%であった。概ね半数の学生が 2～5 時間の滞在時間となっている。また、アスリートコースでは「8 時間以上」が 7.9% (トレスポ 3.6%)であり運動部の活動時間が反映していると考えられる。設問 16、「睡眠時間(1日あたり)」

は、5～7時間の層が多く、トレスポ 60.2%、アスリート 61.8%であった。設問 17、「趣味や娯楽の時間(1日あたり)」は、1～3 時間の層が多く、トレスポ 57.1%、アスリート 58.5%であった。スポーツや健康を学ぶ学生として、また、アスリートコースでは競技者のコンディショニングの観点からは、睡眠時間を増加し(8時間を確保)その分娯楽の時間を減らすことも必要と考えられる。

項目 4 2024 年度を平均して、授業期間中以下のことをした時間について

設問 19、「全履修科目を平均した場合の授業欠席回数(15 回授業を基準にして)」は、「なし」「1～2 回」の層がトレスポ 66.1%、アスリート 80.9%で概ね良好といえる。設問 20、「部活動やサークル活動を行った回数(一週間あたり)」で「なし」がトレスポ 47.3%、アスリート 10.5%と相反した。競技者を受け入れるアドミッション・ポリシーのアスリートコースは強化部所属の学生が多くこの結果になったと考えられる。設問 21、「アルバイトの回数(1 週間あたり)」は、トレスポにおいて「なし」の層が 5.1%となり、約 95%の学生がアルバイトをしている。アスリートにおいては「なし」の層が約 42.8%となり、約 60%の学生がアルバイトをしている。授業時間外はアルバイトを行っている学生が多く、授業・部活動・アルバイトと忙しい学生生活を送っている様子である。設問 22、「ボランティア活動の回数(1 年間あたり)」は、トレスポにおいて「なし」の層が 51.6%、アスリート 72.4%となっている。設問 21 の結果の様に「忙しい学生生活」はボランティア活動を行うまでの余裕がないと考えられる。

項目 5 本学の教育内容や設備、学修支援に関して

設問 23、「授業の内容」は、「とても満足」「かなり満足」「やや満足」しているが、トレスポ 92.8%、アスリート 96.1%であった。設問 24、「教育内容」は、同じくトレスポ 97.2%、アスリート 96.0%で授業や教育内容について満足度が高いといえる。カリキュラムポリシーと学生のニーズに乖離がないことがわかる。設問 25、「学生生活」は、同じくトレスポ 93.8%、アスリート 95.4%であった。施設に関しては、設問 26、「講義教室の設備(空調や照明を含む)」、設問 27、「演習室や実習室の設備や器具」、設問 28、「メディアライブラリーセンター(図書館)の設備や学修環境」、設問 29、「保健室や付属の医療施設」、設問 30、「学生食堂」において同じく 90%台を占め満足度が高いことがわかる。学習支援に関しては、設問 31、「学科・コースの教員による指導・相談」、設問 32、「事務職員によるサポート」、設問 33、「就職支援室による進路・就職に関する支援」は、両コースともに同じく 90%台を占め満足度が高いことがわかる。特に、設問 32、「事務職員によるサポート」では、トレスポ 96.4%、アスリート 97.4%で事務職員のサポートが厚く、それに対しての学生の満足度も非常に高いことがわかる。設問 34、「大学全般を総合的に判断して」は、同じくトレスポ 93.8%、アスリート 96.7%であり、総じて両コースの学生の教育内容、設備、学修支援について満足度が高くカリキュラムポリシーが学生に反映されていると考えられる。

項目 6 不安や悩みに関して

質問項目で「大いにある」「少しある」の回答が多いのが、設問 37、「希望の就職先や進学先へいけるか不安だ」で、トレスポ 62.8%、アスリート 56.6%。続いて設問 36、「卒業後にやりたいことがみつからない」トレスポ 48.3%、アスリート 48.7%であった。総じて将来に関しての不安や悩みが大きいことがわかる。さらにそれら悩みの相談相手は、設問 43、「主な相談相手」から、友人や家族が上位で、「大学の教職員」

はトレスポ 1.0%、アスリート 3.5%と低値であった。学生は友人や家族のように「近い存在」を相談相手とすることが多く、教職員は「遠い存在」なのかもしれない。我々教員は、授業やセミナーでの進路・就職指導、オフィスアワーでの個人指導により、学生との接点を増やすことが必要と考えられる。

項目7 学修成果について

大学入学時に比べて能力がついたと思うか

コースの教育内容(カリキュラムポリシー)を反映して専門知識についての設問 52、「健康・スポーツに関する専門知識」(アスリートは、設問 51、「スポーツ医科学に関する専門知識」)、「少し付いた」「かなり付いた」「十分付いた」がトレスポ 96.1%、アスリート 94.6%。また、実践力についての設問 54、「体育・スポーツ・健康に関する実践力」(アスリート設問 55)では、同じくトレスポ 96.8%、アスリート 98.7%。さらに、設問 59、「実習、現場体験、ボランティア経験等によって身につく社会貢献力」では、同じくトレスポ 93.5%、アスリート 86.2%となり、専門的な知識と実技能力を取得し、それらをディプロマポリシーにある「積極的な社会貢献姿勢」として発揮する学修成果を得ていると考えられる。

4 年生「成長実感・満足度」

前出の学修成果の結果を、4 年生の「成長実感・満足度」としてしてみると、コースの教育内容を反映している、専門知識についての設問 52、「健康・スポーツに関する専門知識」(アスリートは設問 51、「スポーツ医科学に関する専門知識」)、「少し付いた」「かなり付いた」「十分付いた」がトレスポ 97.5%、アスリート 94.6%。また、実践力についての設問 54、「体育・スポーツ・健康に関する実践力」(アスリート設問 55)では、「少し付いた」「かなり付いた」「十分付いた」がトレスポ 97.4%、アスリート 97.3%となり 4 年間の専門的な知識と実技能力の取得をほとんどの 4 年生が高く実感していると考えられる。

まとめ

トレスポ・アスリートの学生は、指導者や教員養成に関わる資格取得に意欲のある学生がそれらの資格取得を軸に学修を行っている。また、教育内容や設備、職員らによる学修支援に関して満足度も高い。学修成果についても、専門的な知識や実践能力についての成長を感じている。その一方で、将来に関しての不安や悩みを持っている者も多い。我々教員は、単に専門知識の教育だけではなく、課外やオフィスアワーの活用など授業以外で学生との接点を持つことで学生が持つ不安や悩みが軽減するような働きかけが必要と考えられる。

以上

2024 年度 健康医療スポーツ学部

医療スポーツ学科 動物医療コース

学修行動と学修成果調査アンケートの解析

動物医療コースは 2022 年度に開設されたが、完成年度に達していないことから 2024 年度現在は 1 年生～3 年生が在籍しているのみであるため、2025 年の完成年度にはデータがさらに蓄積されることで本コースの傾向や実態が鮮明になると推測される。

2024 年度 学修行動と学修成果の調査結果(学科・コース別)において、大学全般を総合的に判断した結果では「やや満足」も含めて 90%以上の学生が満足の意思を示している中で、学科・コース教員による指導・相談では、本コースの教員に対してはほぼ 60%が満足してくれており、「やや満足」を含めると 99%になり、日頃からの本コース教員の学生に対する姿勢が評価されていると判断する。

設問 1)「人間愛(利他の心)は身に付きましたか。」について、学年間で違いはあるものの、概ね身に付いているとの回答が 90%以上あったが、「やや身に付いた」が 43%もあったことから、今後どのような指導をしてこのパーセンテージを減らすかの検討が課題となる。大学全体でもこの層に対しての改善が必要なため、詳細な調査が望まれる。

設問2)「他者と協働する力は身に付きましたか。」について、60%以上が「十分身に付いた」「かなり身に付いた」と回答しており、「やや身に付いた」を含めると 90%以上となり、これは本コースにおいて、飼養や実習の中で、また授業におけるグループワークの経験が影響していると判断する。

設問3)「自立して逞しく生きる力は身に付きましたか。」について、半数以上が「身に付いた」とされているが、学年が進行した 3 年生においては約 3.6%前後の学生に身に付いていないとあり、これらの学生に対する指導をどうしていくか、この層に絞って改善策を検討することが求められるため、個人面談を強化していくことが必要となる。授業時間外の個人面談時間の確保が年々難しくなる傾向が窺われる。今回の調査でもアルバイトをしている学生の多さ(週 3 回以上)が半数以上として示されている。この背景には、設問 38「経済的に勉強を続けることが難しい」での結果を踏まえれば、アルバイトを理由とした学生の授業後の早期帰宅が 70%以上であることも窺える(これは学生の聞き取りでも確認している)。

設問4・5)「創造的な問題解決能力は身に付きましたか。」「専門性を高める意欲と力は身に付きましたか。」について、さらなる改善が必要なものの、概ね 50%以上の学生が「十分身に付いた」「かなり身に付いた」との回答から、各教員が授業や実習の中で残りの学生の改善についての方針を考え、実践していくことが求められる。

設問 6)「わが国と世界の持続・発展に尽くす力は身に付きましたか。」について、他の設問に比較して身に付いていない学生の比率が高くなっているが、これについては教職員が協力して、動物医療に関わらず、他の分野における具体例を挙げて示すことが重要であり、学生の意識改革を継続することで改善されるものと期待する。

設問7)「授業の予習や復習、授業課題のための勉強」について、学年が上位になるほど確保する時間が短くなっていることは問題となるが、背景に生活のためのアルバイトなどがある場合も含め、詳細な調査をする必要があ

り、その結果を踏まえた上で指導を行っていく。

設問8)「学修支援システム(「manaba」)を利用した勉強」について、教員側の利用頻度との関係があるため、その調査をした上で、改善が必要かを検討する。

設問9)「授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望」について、授業は終了時間まで行う授業がほとんどであることから、授業終了時間後、次の教室への移動時間等の確保が必要であり、質問等を遠慮する学生も少なからず存在する。またオフィスアワーの利用率の低さは、授業後の夕方に設定されている場合もあり、前述の如く、早期に帰宅する学生の比率が高いことも起因している可能性がある。

設問10)「就職や資格取得に関わる勉強」について、就職への意識が高まる高学年において、そのための勉強に向き合う姿勢が読み取れるが、こちらも1年生からの意識付けが重要であり、そのことを説明できる教員の存在が必要不可欠である。このため教員採用の際には多様な前歴を有する人材の確保を心掛けている。

設問11)「友人と一緒に勉強」について、高学年になるほど、個人での勉強を優先する傾向にあるが、これも個々の学業以外の時間の使い方が変化し、一緒に過ごす時間が合わなくなっていることも影響している可能性はある。

設問12)「メディアライブラリーセンター(図書館)を利用した勉強」について、高学年ほど利用率が低下する背景には、充実化は努力しているものの、動物医療に関する専門書の絶対量が図書館に少ないことも起因している可能性があるため、改善していく。

設問13)「学内の自習用教室等を利用した勉強」について、これまでの回答と同じく、学生の早期帰宅が主な理由と考えられる。

設問14～18)「授業時間外に行った予習、復習、授業課題のための学修時間(1日あたり)」について、「1時間未満」「1～2時間」の層が約72%であり、1日の授業数を考慮すると授業時間外の学修が不足している結果となった。授業内容を理解するためには予習の時間は大切であり、この点を重視して各教員に指導を促す。

設問15)「学内で過ごす時間」について、7時間までの割合が73%であり、授業終了後、早々に帰宅する傾向が読み取れる。

設問16)「睡眠時間(1日あたり)」について、約1/3の学生が5時間未満であり、6時間未満の学生も含めると約70%を占めることになり、睡眠が十分にとれていない学生の比率が高い。この理由は明らかではないが、設問17)「趣味や娯楽の時間(1日あたり)」および設問18)「本(電子書籍含む)を読んだ時間(1週間あたり)」本(電子書籍含む)を読んだ時間(1週間あたり)での結果から、本はあまり読まず(1週間で1時間以内が約63%)、設問17)趣味や娯楽の時間(1日あたり)の「趣味や娯楽の時間」3時間以上が約40%以上の回答や、以後の設問21)「アルバイトの回数(1週間あたり)」の結果も合わせると、今後も睡眠時間の短い状況が続く学生が一定数在籍することが予想され、学業継続への影響も懸念される。

設問19)「全履修科目を平均した場合の授業欠席回数」について、高学年ほど3回以上の欠席者が増える傾向にあり、問題視している。これについては1年生から指導しているが、個々の事情を軽視できないこともあり、どのように指導すべきか検討している。

設問20)「部活動やサークル活動を行った回数(1週間あたり)」について、本コースは目指す分野が学内の他学科・コースと独立し、かつ異なるためか、他の学科・コースとの交流が少なく、それが数字に現れている。

設問21)「アルバイトの回数(1週間あたり)」について、アルバイトは週3回以上の学生が50%以上を占めるが、学業継続のために長時間のアルバイトに従事する学生もいるため、疲労の蓄積が出席日数だけでなく、授業中の集中力への影響も懸念される。

設問22)「ボランティア活動の回数(年間当たり)」について、全体的に少ない傾向にある。この理由は学業以外

の時間の利用目的がすでに学生達にあること、動物医療関係のボランティアが少ないことなども理由と考えられるが、今後は保護活動などにも参加する学生が出てくることが予想される。

設問 23)「授業の内容」について、学年上位で不満の比率が高くなる傾向にあり、大学全体に比較しても高い傾向にある。内容について調査した上での改善が求められる。

設問 24)「所属する学科・コースで学ぶことができる教育内容」について、3 年生になると不満が解消されているが、設問 23 の結果と一致しない。高学年では専門教育、特に臨床教育(講義・実習)が始まると興味があるものが多くなるため、不満は減少すると考えられる。また本コースは現役の動物病院の院長や副院長、前職が動物病院関係者である教員が多くいることも現場の雰囲気を含めた幅広い教育ができ、学生の満足度を高めている理由と推察される。

設問 25)「学生生活」について、満足度が大学全体に比較しても低く、上位の学年で低い傾向にある。この理由は不明であるため、調査の必要がある。

設問 26・27)「講義教室の設備(空調や照明を含む)」および「演習室や実習室の設備や器具」について、学年が上位になるほど不満が多くなっており、千葉キャンパスの問題であるかは不明であるため、大学での調査が求められる。

設問 28～30)「メディアライブラリー(図書室)の設備や学修環境」「保健室や付属の医療施設」「学生食堂」について、「学生食堂」で不満が垣間見えるが、これは学生食堂のスペースとの関係で混雑が昼間に集中することへの不満が大きい可能性が高い。

設問 31)「学科・コースの教員による指導・相談」について、ほぼ満足の結果となり、教員や職員の方の姿勢が学生の求めるものに一致している結果となった。

設問 32～34)「事務職員によるサポート」「就職支援室による進路・就職に関する支援」「大学全般を総合的に判断して」について、学年により差はあるものの、多くが満足とする結果であることから、職員の方々の日頃からの対応に感謝したい。

設問 35)「授業内容についていけない」について、1 年生および 3 年生で「付いていけない」の回答が多くなるが、1 年生は大学の授業と高校の授業のギャップに戸惑っていることもある。3 年生は前の調査で予習や復習の時間が少ないことも関係するため、教員側の努力も必要であるが、予習の大切さを周知する努力もしていきたい。

設問 36)「卒業後にやりたいことがみつからない」について、特に 3 年生において 78%もいることは大きな課題と捉えている。一方、学生の多くが動物医療の現場への就職を考えていることが学生アンケートの結果からも明らかとなっている。この設問への回答は、設問 37) について、「希望の就職先や進学先へ行けるか不安だ」の結果とも一致しないことから詳細を確認していく。

設問 38) について、「経済的に勉強を続けることが難しい」については、この結果は深刻であり、アルバイト志向への加速に繋がり、結果的に学業への影響が危惧される。大学としてどのようなバックアップ(奨学金の拡充、学生アルバイトが可能な業務を洗い出し、大学内で出来るだけ経済的な援助を行う等)ができるのか早急な対策が求められる。

設問 39～43)「学内の友人関係に悩みがある」「家族との関係に悩みがある」「身体面の健康状態への不安や悩みがある」「精神面の健康状態への不安や悩みがある」「Q35～Q42 の不安や悩みについて誰に相談しましたか。または相談しようと思っていますか。」について、相談相手の多くは家族や学内外の友人であるが、悩みの内容によっては身近な人に話せない場合もあり、この受け皿に大学関係者になっている可能性もある。

設問 44～46)「一般的な教養」「文章(レポート)を書く能力」「他者とのコミュニケーション能力」について、一般的

な教養についてはフレッシュセミナーで様々な専門家を招いた特別講義やセミナー内で、これらを身に付けるための内容を盛り込んだ効果も寄与していると推測される。多くの教員が現職または前職において動物病院長や勤務獣医師または動物看護師であり、社会の一員として経験から社会人としての意識が高く、その視点で学生に対応していることも影響していると考えられる。

設問 47)「健康に関する強い興味関心」について、健康に関する興味関心も「かなり付いた」を含めると 80%を超えた背景には、専門科目において人の健康を対象にした科目や、医師や医療分野における看護師資格をもつ教員の存在、そして動物の健康維持に関する知識の醸成が学生の意識改革にも反映している可能性が高い。

設問 48)「動物について幅広く理解する態度」について、動物について幅広く理解する態度では全学年で高い結果、特に 1 年生においてその傾向が認められた背景には、2024 年度より、1 年生にはアニマルケアの学内飼育犬の飼養を担う「飼養チーム」への義務付けたことにより、全員が朝世話や夕世話などを通して学んだことが大きく寄与していると考えられる。

設問 49)「チームワークで対応する力」について、チームワークで対応する力では 40%弱の学生で不安が残る結果となっている。この点を踏まえ、さらにこの力が付いた学生の比率を上げるべく、コロナ禍の影響により出来なかった新たなイベント等の試みも含めて検討の余地がある。

設問 50～61)「動物看護に関する専門職として学び続ける力」「人と動物の関係について科学的に考える力」「問題や課題を発見し、合理的に解決する力」「専門分野に関する国内外の文献等の情報を自主的に収集して研究する力」「基礎動物医学各分野における専門知識」「動物行動学・人と動物の関係学などに関する知識、社会医学的知識や動物飼養に関する実践力」「臨床動物医学各分野における専門知識」

「動物に対する高い倫理観や動物福祉の意義への理解」「動物看護に関する専門的な知識・技術」

「動物福祉に関する実践力・発信力」「動物医療に携わる使命感・責任感」「動物介在教育、動物介在活動および動物介在療法に関する専門的な知識・技術」について、全体的に学年間で変動があるものの、1 年生および 3 年生で「十分付いた」「かなり付いた」高率であるのに対し、2 年生で低くなる傾向にある。この理由は明らかではないが、2 年生は在籍数が多いこと、また成績においても 2 年生は二極化が認められる傾向にあり、成績が伸び悩む層が存在していることも 1 年生および 3 年生に比べて低い傾向になる要因の可能性がある。今後は改善を行うべく、場合によっては国家試験受験に向けて特別指導も視野に入れた対応が必要となることが予想される。

全体的には、多少の変動はあるものの、「学び続ける力」を始め、「考える力」「解決する力」「研究する力」は学年が上がることに向上しており、今後は、「少し付いた」「あまり付いていない」「全く付いていない」の層を減少させる努力を続けるため、2025 年度より他大学で長く動物看護教育に経験のある教員や国試対策に積極的に従事してきた 2 人の教員の採用を機に、2 人の知恵を取り入れながら、教員全体で改善を進めていく。

以上

2024 年度 健康医療スポーツ学部

看護学科

学修行動と学修成果調査アンケートの解析

2024 年度学修行動と学修成果調査アンケートについて、4 年生の回答を中心に分析した結果を以下にまとめた。

1. 本学の「目標とする力」がどの程度身についたかについて

【人間愛(利他の心)】は、「十分身についた」「かなり身についた」「やや身についた」と回答した結果は、4 年生の 95.4%であった。同様に【他者と協働する力】は、100.0%、【自立して逞しく生きる力】は、100.0%、【創造的な問題解決能力】は、97.0%、【専門性を高める意欲と力】は、100.0%、【わが国と世界の持続・発展に尽くす力】は 92.3%であった。

全ての設問で 4 年生の 95%以上が本学の目標とする力が身についたと回答している。特に、「他者と協働する力」、「自立して逞しく生きる力」、「専門性を高める意欲と力」については 100%であった。下級学年でも 9 割以上が身についたと回答しているが特に最高学年の 4 年生では、専門領域における実習が半部以上終了していることから、これらの力が身についたと実感しているのであらうと考えられる。また 9 割を超えているものの、最も回答率が低かった「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」については、国際的視野を養う授業の充実が必要であると考えられた。

2. 本学の教育内容や設備、学修支援に関する満足度について

【メディアライブラリー(図書館)の設備や学修環境】は、「とても満足」「かなり満足」「やや満足」と回答した結果は、4 年生の 90.8%(昨年 78.4%)であった。同様に、【演習室や実習室の設備や器具】は、87.7%(昨年 76.1%)、【講義教室の設備(空調や照明を含む)】は、72.3%(昨年 67.0%)、【学生食堂】は、89.1%(昨年 77.3%)、【所属する学科・コースで学ぶことができる教育内容】は、92.4%(昨年 81.8%)、【学科・コースの教員による指導・相談】は、90.8%(昨年 86.4%)、【事務職員によるサポート】は 81.6%(昨年 76.1%)、【保健室や付属の医療施設】は、93.9%(昨年 85.2%)であった。

4 年生の約 7～9 割の学生が満足していると回答しており、全ての項目で昨年度の 4 年生の回答率を上回っている。「所属する学科・コースで学ぶことができる教育内容」および「学科・コースの教員による指導・相談」については 9 割を超えている一方で、「講義教室の設備(空調や照明を含む)」が 8 割を切っている。このことは、教育・指導内容には特に不満がなくとも、教室をはじめとした設備面への不満を持つ学生が少なくないことを表しており、設備面をより一層充実させることが必要であると考えられる。しかし先に述べた通り全ての項目で昨年度の回答率を上回っておりこれは看護学科がちはら台キャンパスから千葉キャンパスに移転した影響であると考えられる。「メディアライブラリー(図書館)や学修環境」の満足度が昨年度に比べて上昇しているがこれは、ちはら台キャンパス図書館と比較して開館時間が長くなったことが学生の満足度を上げる要因になったと考えられる。

また「所属する学科・コースで学ぶことができる教育内容」への満足度が 9 割を超えている。これは看護学科のみのキャンパスでの学修環境から、他学科と一緒にのキャンパスでの学修環境への変化により、特にカリキュラムが

変更されたわけではないが、学ぶことができる学習内容への満足度の向上につながった可能性がうかがわれる。さらに「事務職員によるサポート」についての満足度は8割を超えており、おおむね良好である。学修面以外の学生に関する相談窓口として今後、事務職員のサポートはより一層重要になると考えられ、学生が不満に思う内容について具体的に把握し、改善できればと考える。

一方、「学生食堂」に関しては満足度が昨年は8割を下回っていたが今回9割近くまで上昇している。これは千葉キャンパスへの移転によりメニューの種類が増えたことや朝食時の営業が行われたことなどが大きく影響していると考えられる。

3. 本学入学時と比べて、成長実感について

【授業の予習や復習、授業課題のための勉強】について、「頻繁にした」「かなりした」「時々した」を合わせると全学年では85.2%（昨年79.1%）であった。学年別では、1年生77.5%（昨年73.8%）、2年生83.8%（昨年78.5%）、3年生91.3%（昨年91.2%）、4年生90.8%（昨年94.3%）であった。低学年はおおよそ8割、高学年はおおよそ9割であった。また、【就職や資格取得に関わる勉強】について、「頻繁にした」「かなりした」「時々した」を合わせると全学年では64.3%（昨年62.2%）であった。学年別では、1年生33.4%（昨年37.3%）、2年生69.7%（昨年43.1%）、3年生67.1%（昨年66.1%）、4年生93.9%（昨年93.2%）であった。このことは、学修の姿勢は、学年があがるとともに専門分野の授業が増え、授業の興味や関心が高まり、高学年はより意欲的になっていると考えられる。また2年生において「就職や資格取得に関わる勉強」の回答率が昨年度より大きく上昇しているのは、コロナ禍が明けた影響により2年生のセミナー教育などで地域活動が増え、学生が自分自身の目指す職種について考える機会が増えたことによるものと考えられる。

専門的な知識と技能の修得状況について、【看護学に関する専門的な知識】は、「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」と回答した結果は、4年生の98.4%（昨年94.3%）、【看護学に関する専門的な技術】は、98.4%（昨年95.4%）であった。昨年と比較してどちらも上昇している。キャンパス移動による悪影響はなく、学内における講義および演習、さらに臨地における看護学実習によって、学生の成長実感が養われたことがうかがわれる。

次に、看護師としての心構えについて、【高い倫理観と豊かな人間性を備えた心温かい人間関係を創造する力】は、「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」と回答した結果は、4年生の97.2%（昨年95.4%）であった。このことから、高い倫理観や豊かな人間性、心温かい人間関係の創造など看護師に求められる能力について、昨年度よりさらに高い割合の学生が修得できたと実感していることが確認できる。看護や医療に関する研究の心構えについて、【人間について幅広く理解する力】は、「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」と回答した結果は、4年生の98.4%（昨年93.2%）であった。同様に、【社会について幅広く理解する力】は98.4%（昨年90.9%）、【物事を科学的に考える力】は92.3%（昨年89.8%）、【地域における保健医療ニーズの特性を把握する力】は96.9%（昨年93.2%）、【地域にある人々の健康生活を支援する力】は93.9%（昨年92.0%）、【保健医療福祉チームの一員として連携・協働する中で責任ある行動をとる力】は95.9%（昨年93.2%）、【看護専門職者として新たな課題を見いだし探求する姿勢】は95.4%（昨年95.5%）、【看護専門職者として継続的に自己研鑽する力】は98.5%（昨年92.0%）であった。続いて、看護や医療の実践力について【看護の実践能力】は、「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」と回答した結果は、4年生の100.0%（昨年95.4%）、【科学的根拠に基づいた看護実践の展開】は、98.4%（昨年96.6%）であった。4年生の95%以上が身に付いたと回答し昨年よりさらに高い傾向であった。本学の建学の精神に則り、実学の精神を基本とした学内における講義および実習、そして臨地における看護学実

習により専門知識を展開できる能力を在学中に成長させることができたと考えられる。

次年度以降も引き続き学生の声を十分に把握できるよう調査回答率の向上に取り組む予定である。具体的には、引き続き学修行動と学修成果調査の重要性を学生および学科教員へ周知し十分な回答を得られるように電子メールや manaba、UNIPA 等による掲示を継続し、大学ホームページの結果公表および学生へのフィードバックにより対象学生の学修行動と学修成果調査に対する理解が深まり協力が得られるべく取り組んでいきたい。

また学生の学修行動を充実させるために学修環境をより充実させるよう学科として努力していきたい。2027 年度のちはら台新キャンパス完成に向けて教育内容をより充実させていきたいと考える。

以上